II-(5) 利用者の情報行動

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科講師
松林 麻実子

I. 大学図書館における「利用者」

- 大学図書館がサービス対象とすべき「利用者」とは
  - 研究者（院生を含む） or 学部生
  - 大学図書館における「学部生が中心」という意識
- 利用者実態調査の対象としての「研究者（院生を含む）」
- 利用者教育の対象としての「学部生」

II. 利用者を理解する枠組

- これまで実施されてきた利用者実態調査
  - レファレンス・サービス的な理解の延長
    目の前にいる利用者が，図書館をいかに利用し，何を期待するか
  - 自由回答式による直接的な表現を望む
  - 図書館利用を独立した行為としてとらえる
- 社会的行為としての「図書館利用」
  - 「図書館をいかに利用しているか」ではなく，「人々が日常生活（研究活動）の中で，いかに図書館を位置づけているのか」を知る
  - 他の要素，代替物との関連を考慮する
  - 様々な情報源をいかに使い分けているかを考える

III. 医学研究者の情報利用行動

- 2003 年調査
  - 物理学・化学・病理学の三分野の利用動向はほぼ同一
  - 研究者にとっての学術情報とは「学術雑誌論文」
    他のメディアは学術雑誌論文にとって代わるような存在ではない
  - 電子ジャーナルが普及
    「ほぼ毎日」（24.8%），「週に 1 回以上」（37.0%）
  - 「図書館への来館」から「ウェブ閲覧」へ
- 2007 年調査
  - 日本の医学部 80 大学所属研究者 2,033 名を抽出，回収率 32.4%
  - 論文を読む形態
    「印刷版そのまま」（17.0%），「印刷版のコピー」（12.3%）
    「EJ を印刷して」（53.2%），「EJ を画面上で」（9.4%），「EJ 画面＋印刷」（8.2%）
  - 普段利用する検索手段

「PubMed」(87.7%),「サーチエンジン」(62.2%),「図書館」(69.7%)
「雑誌ブラウジング」(73.7%)

- オープンアクセス文献の利用(複数回答)
  「PMC」(62%),「オープンアクセス雑誌」(38%),「無料提供サイト」(15%)
  「使ったことがない」(17%)
- オープンアクセスに対する認識
  「理念に賛同するが行動は変えない」(41%),「理念に賛同し行動も変える」(37%)
- オープンアクセスの実施
  「PMC」(19.2%),「自身のウェブサイト」(1.2%),「機関リポジトリ」(2.3%)

Ⅳ. 歴史学研究者の情報利用行動

- 2008 年調査
  - 日本の大学に所属する歴史学研究者 1,357 名を抽出
  - 歴史学研究者にとっての学術情報とは
  - 情報入手および検索手段
  - 電子メディア利用頻度
  - オープンアクセスおよび機関リポジトリに対する認識

Ⅴ. まとめ

- 研究者の情報利用動向(理系・文系の差異に着目して)
  - 電子ジャーナルの普及と情報検索
- 機関リポジトリをいかにして実現するか
  - 利用者の視点から

【参考文献】

- 2003 年調査(物理学,化学,病理学)
  - 松林麻実子,倉田敬子. e-print という情報メディア:日本の物理学研究者への調査に基づいて. 日本図書館情報学会誌. Vol51, No.3(2005)
  - Keiko Kurata et al. Electronic Journals and Their Unbundled Functions in Scholarly Communication: Views and Utilization by Scientific, Technological and Medical Researchers in Japan. Information Processing & Management Vol.43, p.1402-1415, 2007.
  - 倉田敬子. 研究者にとっての学術情報流通の電子化とオープンアクセス. [シリーズ・図書館情報学のフロンティア No.7] 日本図書館情報学会研究委員会編.『学術情報流通と大学図書館』. 東京,勉誠出版, 2007.
- 2007 年調査
  - 倉田敬子ほか. 日本の医学研究者の電子メディア利用とオープンアクセスへの対応. 2007 年度三田図書館・情報学会研究大会予稿集.